

ヤコブ 1:18 「初穂」

あけましておめでとうございます。今日は2015年1月4日です。こうして神の家族とともに集まるのは、年の初めの日曜日のもっともふさわしい過ごし方です。

新年を迎えると、楽道家の人たちはあらゆる可能性に心躍らせます。物事を悲観的にとらえる人たちでさえ、年の変わり目に物事が好転するかもしれないという可能性を認めます。この新しい年に踏み出すにあたり、キリストにあって私たちがどういう者であるかを再認識したいと思います。キリストにあるアイデンティティーが、私たちの性質や行動すべての土台であるからです。

今朝のメッセージは、聖書の一節のみに基づいています。この一節に多くのメッセージが詰まっています。**ヤコブ 1:18** です。

「1:18 父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです。」

以前、ある日の礼拝後に娘のケイティと話をしました。日曜学校で初穂について聞いたのだそうです。けれども、初穂になるという意味がわからないということでした。それで私は、初なりを神にささげなさいと神がイスラエルの民に命じられたことを話しました。初なりとは、初めてなった実や穀物、初めて生まれた家畜の子、初めての子などすべてです。

初穂は神のものです。家畜や収穫の場合は、神にいけにえとしてささげました。子どもの場合は、あがなわれなければなりません。初めて生まれた子は神のものです。その子はいけにえとしてささげる代わりに、子羊をささげるように神は命じられました。貧しい家庭であれば、鳩2羽をささげます。イエスがお生まれになって8日目に、マリヤとヨセフは鳩を神殿でささげました。

このみことばは、私たちはみな初穂だと語ります。これは神との新しい契約です。キリストにある者は皆、神の初穂、つまり神のものなのです。

ここにはあとふたつ重要なことが記されています。これら3つのことを今日は考えていきましょう。

1. 私たちは神の被造物の初穂である。つまり、特別な存在です。
2. 神は私たちをみこころのままにお生みになった。つまり、みこころによって私たちを神の家族に迎え入れてくださいました。このことから、神が私たちを深く愛しておられることがわかります。
3. これは「真理のことば」によって実現した。真理は私たちを自由にし、力を与えてくれます。真理を知ってそれを信じることは大切です。

まず、私たちは神の被造物の初穂です。私たちは神にとって特別な存在です。こう言うと、少し傲慢に聞こえますか。私はとても偉いので神さえ私を特別視なさると言ったなら、それは傲慢です、まったくの誤りです。

私たちがどのようにして神の初穂になったかを覚えておきましょう。それは、真理のことばをもって神が私たちを生んでくださったからです。私たちではなく神の御業です。

私たちは神の恵みを受けるにふさわしい者ではないということを実感しなければなりません。神の家族の一員になるべき人間ではありませんし、天国に入る資格もありません。けれども、神からの恵みをいただき、神の家族の一員としていただけます。いつの日か天国に行けるのも、神のおかげです。

初穂をもう少し理解するために、初穂について書かれた旧約聖書の箇所を見てみましょう。初穂についてはたくさんの箇所に記されていますが、ネヘミヤ書の一節がわかりやすい大筋です。

ネヘミヤ書は、イスラエル王国とユダ王国の人々が捕囚となった後に書かれました。人々は神の掟に背き、偶像を拝みました。偶像崇拜する中で、我が子を火で焼いていけにえとしてささげるなどのおぞましい行いをしました。

その結果、神は民を退けて囚われの身とされました。イスラエルの民の多くはバビロンで奴隷とされるか、あるいはそこに移住させられました。70年後、神は民の一部を故郷に帰されました。人々はエルサレムに帰って、神殿を再建しました。指導者は民を集めて、自らを神にささげる儀式を行いました。ネヘミヤ書 10 : 35-37 は、その誓いの一部です。

「10:35 また、私たちの土地の初なりと、あらゆる木の初なりの果実とをみな、毎年、【主】の宮に携えて来ることに決めた。 10:36 また、律法にしるされているとおり、私たちの子どもと家畜の初子、および、私たちの牛や羊の初子を、私たちの神の宮に、私たちの神の宮で仕えている祭司たちのところに携えて来ることに決めた。 10:37 また、私たちの初物の麦粉と、私たちの奉納物、およびあらゆる木の果実、新しいぶどう酒と油を、祭司たちのところに、私たちの神の宮の部屋に携えて来ることにした。また、私たちの土地の十分の一はレビ人たちのものとした。レビ人が、彼ら自身で私たちの農耕するすべての町から、その十分の一を集めることにした。」

ここでは初なりと記されていますが、初穂とは、人々が受けるすべてのものの最初の部分です。今日でも十分の一のささげものという習慣として残っています。これは、私たちの収入の初めの十分の一を指します。多くのクリスチャンは良心から、収入の十分の一を教会やクリスチャンの団体にささげます。これは大切なことですが、今日私がお話したい要点ではありません。今日皆さんにお伝えしたいのは、イエス・キリストを信じるクリスチャンなら、私たちは初穂であるということです。つまり、神のためのものでおきの存在です。だから私たちは特別な存在なのです。

聖書は、イエスを信じて神の赦しを受け入れるなら、私たちは新しい人になると語ります。同時に、神のためにとっておかれた者となります。私たちは神のものです。私たち自身が神にささげられたと同じです。私たちのお金や日曜の朝の時間だけではなく、私たちそのものです。

コリント第一 6 : 19-20 「6:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」

聖書の他の箇所は、私たちは神の奴隷であるとか僕であると語ります。これは良いことでしょうか。この世に存在する奴隷制は善いものではありません。奴隷制は多くの苦しみを生みます。人間の尊厳を尊重しない制度です。

しかし、神の奴隷になることは、それとはまったく違います。私は神の奴隷でいられてとても幸せです。それは神が私を引き取ってくださったということだからです。神は霊の領域において私に神の印を押してくださいました。神が私の面倒を見てくださいます。神が私の所有者です。神はご自身に属するものを大切にしてくださいます。

これは逆説のようなものです。私たちは神の奴隷となると、それ以前より良い状態になります。神の奴隷となれるのは特権です。私たちは神のものとなります。霊的に死んでいた私たちに命を与えてくださいます。恐れにとらわれない人生、そしてこの世の命の後に来る永遠の命です。神はそれほど素晴らしいことをしてくださいましたが、私たちはその価値を十分に理解できていません。

私は、このことを描いた本を読んだことがあります。それはフィクションですが、ここで私が言おうとしていることをうまく表現しています。イエスは素晴らしい豪邸を建てました。そして、その家の住人としてホームレスの人を選ばれました。

そこは素敵なところでした。家中にカーペットが敷き詰められ、寝室にはそれぞれバスルームがついていました。キッチンには最新の設備が完備され、おいしい料理を作ってくれるシェフまでいました。

裏庭にはプライベートプールがあり、その横にはジャグジーもありました。とにかく見事な家です。私もそんな家に住んでみたいです。

その人が新しい家を満喫している様子を見ようとイエスが訪ねてみると、その人の姿が見当たりません。リビングにも、ダイニングにも、書斎にもいません。声をかけても返事がありません。

最後に地下室に降りるドアのところに行きました。地下室は窓もない暗い場所です。物置として使う場所です。イエスが地下室に降りる階段のところで声をかけてみると、やっと返事がありました。

イエスはおっしゃいました。「こんな素敵なお家を与えたのに、どうして地下にいるんだい？」

男は答えました。「こんなきれいな豪邸に住む資格は私にはありません。私には地下で十分です。路上生活をしないで済むようにして下さってありがとうございます。けれども、上に住むことはとてもできません。私にはりっぱすぎます。」

これに対し、イエスは少し苛立ったようにおっしゃいました。「あなたがここに住めるように私はこの家を建てた。あなたにあげたのだ。代償は大きかったが、あなたを愛しているからそうしたのだ。どういう権利があって、自分にはふさわしくないと言うのだね？もちろんこれは高価な贈り物だ。けれども、これはあなたのための贈り物なのだから私の気前の良さに文句をつけないでくれ。」

私たちはこの人のようではありませんか。霊的には、イエスを信じる前の私たちはホームレスでした。イエスご自身の命をささげて、私たちのために豪邸を建てて下さいました。私たちがただ地獄を逃れられればよいとイエスは思っておられません。

イエスは、私たちが互いに愛し合うことを望まれます。私たちは喜んで感謝すべきです。私たちは神のもの、初穂なのですから。

この箇所から学ぶふたつめのポイントは、神がそうすることを選ばれたということです。**ヤコブ 1:18**をもう一度読みましょう。「**1:18 父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです。**」「みこころのままに」の部分「神は選ばれた」と訳した聖書もあります。

神は私たちをお生みになることを選ばれました。それは、私たちを愛しておられるからです。

ご存じのとおり、神がお選びになることについては、クリスチャンの間でもさまざまな議論があります。この聖書箇所を始め他の箇所についても、神がある人たちだけをお選びになったと捉える人たちがいます。神が特定の人たちだけをお選びになったのなら、選ばれなかった人たちもいます。誰がクリスチャンになって誰がならないかは、すべて神次第ということになります。

これに対し、誰にも信じるチャンスを作ることを神が選ばれたと捉える人たちもいます。こう考えるなら、神は救いをすべての人に差し出されますが、受け入れることを選ぶ人は限られています。この場合、その人がクリスチャンになるかならないかは、その人次第ということになります。

数年前、ダン牧師がエペソ人への手紙のメッセージをされました。エペソ人への手紙には、世界の基の置かれる前からイエス・キリストにおいて私たちをご自身の子とされることを神が選んでおられたというみことばがあります。ダン牧師はその部分をうまく説明してくれました。

ダン牧師は、廊下を歩いている人をたとえに挙げて話しました。廊下にはドアがひとつあって、そこには「どなたでもご希望ならお入りください」と貼り紙がしてあります。

このドアは、入りたい人は誰にでも開かれています。多くの方はそのドアを素通りするでしょう。このドアは入りたい人なら誰でも入ることができるのに、多くの方は自分には関係ないと思うのです。

けれども、ある人がそのドアを開けて中に入ると、そこにはすばらしい宴席が設けられていました。テーブルにはごちそうがいっぱいです。たくさんの席があり、ひとつの席に自分の名前が書かれた札が置いてあります。

その人がそこに入る前から、それは準備されていました。ドアのほうを振り向くと、今度はドアの内側に「世界の基の置かれる前から神に選ばれた」という貼り紙がありました。

さて、どちらなのでしょう。誰でも入ることができるのでしょうか。それとも選ばれた人だけでしょうか。私たちはイエス・キリストを信じて入りますが、そうして初めて、すべては神のご計画だったことに気づかされます。

私がどのように信じているかはここではっきり言わないことにします。そのお話はまた別の機会に取っておくことにしましょう。ただここで皆さんにお伝えしておきたいのは、私はイエス・キリストを信じてクリスチャンになりました。それは、世界の基の置かれる前から神が私を選んでくださり、私がそれを受け入れたからです。神がそこまで私を愛してくださるとは、なんとも驚くべきことです。

ここで大事なのは、神が私たちを愛しておられるから選んでくださったということです。私たちが信じて神の家族の一員になるのは、私たちが考え出したことではありません。神のアイデアです。私たちがりっぱだからクリスチャンになったのではなりません。私たちがクリスチャンになったのは、神が私たちを生むことを選んでくださったからです。神の恵みを自力で勝ち取ったものではありません。私たちには受ける資格がないのに、神が恵みを施してくださったのです。

自力で神を喜ばせる能力のある人はこの世にひとりもいません。聖書は、自分の力で正しくあれる人はひとりもないと語ります。善い行いをするだけで神を喜ばせることは私たちにはできません。神は喜んで私たちを愛してくださいます。神にもっと愛してもらうためにできることは何もありません。神にもっと喜んでもらうためにできることも何もありません。

これはすばらしいことだと思いませんか。神の恵みをどうやって得るとか保つとかいう心配は無用です。もうすでに与えられているからです。

3つめのポイントは、真理には力があることです。「真理のことばをもって私たちをお生みになりました。」何も考えずにこの部分を通り過ぎないでください。イエスはヨハネの福音書 8 章 32 節でこうおっしゃいました。「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

キリストにあるなら、私たちは新しく造られた者です。以前の生き方から解放されています。しかし、悪魔はそれと違ったことをささやき、私たちを誘惑します。悪魔は、あなたは今までと変わっていないとか、神を喜ばせていないとか、神はあなたをありのままでは愛していないなどと言うでしょう。皆さん、それは嘘です。信じないでください。

嘘に対抗する手段は真理です。暗い部屋に入ったときと同じです。暗さを消し去るには明かりを灯します。悪魔の嘘の餌食にならないためには、真理を照らします。真理はどこから来るのでしょうか。それは、神のみことばにあります。聖書は、神の霊のことばです。日ごろから読んで学び、そこに書いてあることを考えて、それに基づいて生きるなら、真理を知って自由になります。

私たちが何を信じるかが大きな違いを生みます。これは、単なるプラス思考ではありません。真理を信じるか否かは私たちに与えられた選択です。

私たちは真理を信じるか、欺かれて滅びるかのどちらかです。テサロニケ第二 2:10b-12 にはこうあります。「2:10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。 2:11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。 2:12 それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」

神が惑わす力を送り込まれるとありました。これは、人々が真理を受け入れなかったからです。真理を信じるか否かは私たちに与えられた選択です。

C・S・ルイスは、全7巻からなる「ナルニア国物語」という物語の著者です。読んだことがなければ、ぜひ読んでみてください。児童文学なのでわかりやすい文章ですが、寓話の形で永遠の真理が数多く描かれています。

最後の第7巻のタイトルは、「さいごの戦い」です。ナルニア国の最後が舞台です。アスランを信じてついていこうとする人々を迎えに、アスランは帰ってきます。けれどもそこには大軍がいて、彼らを皆殺そうと挑みます。そしてついに、世界を分かち扉にやってきました。

ナルニアの草原に、古い小屋の扉があります。外側からは、ただの扉に見えます。けれども、中にはもうひとつの世界が広がっています。アスランを信じてついてきた人々は、扉の向こうに彼らを待つアスランの姿を見つけます。アスランはうれしそうに彼らを迎え、彼らのために用意した美しい世界へと導きます。

扉をくぐった者の中に、小人たちがいました。小人たちは、アスランを信じる人々と戦い、彼らを愚か者と呼びました。小人たちは扉の向こうには何もないと信じて疑いません。ただ暗くて臭い小屋の中だということです。

小人たちが扉をくぐると、アスランを信じる人々と同じ美しい世界にたどり着きますが、彼らにはそれが見えません。暗闇の中でわらの上に座っていると思ひこみます。

登場人物の子どもたちのひとりが、野原にいることを小人にわからせようとします。すみれの花を摘んで小人のひとりにその香りをかがせようとしますが、汚い糞を顔に近づけたと小人は怒鳴りました。

アスランがおいしそうな料理を用意し、ぶどう酒の注がれた金杯をひとりひとりに手渡すと、小人たちは飲んで食べます。けれども、ごちそうやぶどう酒だとは思いません。干し草と古びたカブを食べ、ろばの飲み水を飲んでいてと思ひこみます。

ついにアスランは言います。「彼らは、信ずるかわりに、ずるくやるたてまえだ。小人たちの閉じ込められているところは、ただ小人たちの心の中だけだが、そこにいまだに閉じこもっている。また、だまされるのを恐れているから、助け出されることもない。こもっているから、抜け出せないのだ。」

皆さんは、真理を見つけてそれを信じてください。真理とは、神が私たちが造り、選び、愛してくださることです。神が私たちが尊いと言ってください。

イエス・キリストを信じているなら、神はいつの日か私たちが御国に連れて行き、冠を与えてくださいます。

これに対する私たちの応答はただひとつ、神への感謝と愛です。こうして神は栄光をお受けになります。

これが今年を生きる土台です。また、残りの人生を生きる土台です。

神の愛と恵みに、私たちも愛と感謝をもって答えるべきです。今から歌う賛美がそのことを語っています。賛美しつつ、その意味を味わってください。イエスにその歌をささげてください。